帝具が暴走して好感度カンストしちゃった

鹿里マリョウ

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

貧しい故郷を救うため帝都に来たタツミは帝都の闇に触れナイトレイドに入る。

帝国を変えると意気込んで一週間で致命的な事件が起こっちゃった話。

目　次

帝具が暴走して好感度がカンストしちゃった?アカメ、シェーレ　1
帝具が暴走して好感度カンストしちゃった?マイン、レオーネ　6
定例会議?ナジェンダ、ラバック、ブラート　13
好感度カンスト済みだった　17
これ俺の村のしきたりだから　23
はじめてのにんむ?（デートとか言わないで）　33
シェーレさんと訓練（訓練です。えっちなプレイじゃないです）　40
帝都までお散歩（直喩）＆ａｍｐ・全ての流れを変えるセリューちゃん　47

帝具が暴走して好感度がカンストしちゃった？アカメ、シェーレ

？かつての活気に満ち溢れた帝国は見る影もなく腐り果てた。
？圧政により広がった格差は最早どうしようもなく、街を歩けば沈んだ表情のならず者達が多く見受けられる。笑い声といえば、肥太った貴族の下卑た笑いか、路地裏から響くチンピラのものかのどちらかだ。
？なればこそ、革命を起こそうというのはごく自然の心理だろう。
？しかし腐り果てても帝国は帝国、一筋縄ではいかぬもの。
？だからこそ、彼らがいる。彼らが斬る。
？彼らの名は、暗殺集団〈ナイトレイド〉。

？■■■

「・・・・・・暇だな」
？ナイトレイドのアジトで、俺は地面に寝っ転がって天井を眺めている。
？かれこれ数時間この体勢で時が過ぎた。
「暇だ」
？俺の名前はタツミ。
？帝都で武勇を上げて貧しい故郷を救おうとしてた男。
？でも予想以上にドロドロでびっくりしちゃってます。
？色々あってナイトレイドに入って一ヶ月経ちました。
？この一ヶ月で俺が受けた依頼、実にゼロ件！
？嘘やん。もう居ないのと同じじゃん。
？入った当初は稽古をつけてもらってた。
？任務もこなしていくつもりだった。

?あの事件が起きるまでは、

?入団から一週間、ナイトレイドにとある帝具が届いた。差出人は革命軍。

?見た目は真っ赤なハート型の宝石で、些か少女趣味過ぎるものの、澱みない真紅の色が目を引いた。

?ボスことナジェンダさんは出払っていてアジトにはいなかった。

?その場で帝具がないのは俺一人だが、流石に新入りに扱えるものでは無い。

?ナジェンダさんが帰ってき次第適性を計り、合えば使うし合わねば送り返すと話が纏まったそのときである。

?帝具が震え出した。

?他のメンバーは即座に警戒体制に入ったが、俺だけは反応が遅れてしまう。

?その隙を逃さぬように、ハートの帝具は俺の胸へと一直線に飛び込んできて、そのまま体の中へと潜り込んで姿を消した。

?が、異変はそこで終わらない。

?内側からナニカが溢れてくる。完全に帝具が暴走していた。

?必死に押さえ込もうと呻いても、爆速で湧き上がってくるナニカには焼け石に水のようだ。

?ナニカが、勢いよく体外へと放出された。

?帝具の名は〝絶対恋愛カーマデーヴァ〟。

?能力は、〝異性からの好感度を上下させる〟こと。

?■■■

?という訳で、あの日外出していたボスを除く女性陣からの好感度がアゲアゲ状態になってしまったようで、任務どころか、アジトの外へ

出ることも禁止され、訓練も怪我したら危ないだとかで一切させて貰えない始末。腹筋腕立てが限界ラインと言われた。イカれてやがるぜ。
「・・・・・・暇だなぁ」
?ずっと家の中で一ヶ月過ごしている。完全に紐となってしまった。ぴえん。
?ダメ人間という事実に打ちひしがれていると、玄関のドアが思いっきり開かれる。壊れそうだからやめて欲しい。
「タツミ、帰ったぞ!!」
?現れたのはアカメだ。
?帰ってくんの早くね?つい数時間前に任務で出ていったばかりなのだが。
?メタくそ息切れしてるところから察するに、超ダッシュで行ってサクッと刺して超ダッシュで帰ってきたのだろう。暗殺ＲＴＡでもしてるのでしょうか。
「今日も悪者を殺したぞ。どうだ?偉いか?」
?な?偉いか?な?タツミ?と俺を目視した途端擦り寄ってくる。ハイライトは消えている。
?あの凛々しいアカメは何処に行ってしまったんだ。
「・・・・・・た、タツミ?足りなかったのか?だ、大丈夫、もっと殺してくるから、もっと役に立つから、な?タツミ?誰か嫌いな奴とかいないか?私に任せてくれれば直ぐに消してくるぞ。あ、マインとかどうだ?アイツ当たり強いだろう?な、葬ろうか?命令してくれタツミ、今すぐ葬りに行くからな」
?何も言わない俺を不安に思ったのか、アカメがとんでもないことを口走り始めた。
?昔のアカメを思い出してたら目の前で仲間を殺害する計画練り始められることある?
?アカメは今見た通り精神がとてつもなく不安定だ。だから一層のメンタルケアが必要になる。それが俺の最近の役割だった。
「おーよしゃしゃしゃしゃしゃ。大丈夫だから落ち着けー。仲間殺そ

うとしないでー」
「んあっ♡た、タツミ？どうしたんだ？」
？アカメはとりま頭撫でとけば落ち着くという研究結果がでている。
チョロいなこの子。
「ちょ、ちょっと・・・・・・んっ、タツミ？・・・・・・ふあ♡んぅ、ひゃ、・・・・・・ぁあ！まって♡♡そこ、だめぇ♡」
？・・・・・・なんかエロくね。
「ふあぁぁ、タツミぃ、すき♡♡すきすきすきすきすきすきすきすきぃ♡♡♡♡」
？・・・・・・なんかエロいね。
「ほら、終わり。風呂入ってきなさい」
？手のひらに頭を押し付けてくるが、切り上げないと永遠に続いてしまう為振りほどく。最近お母さん役が板に着いてきた気がする。・・・・・・いや嬉しくないけど。
「タツミも一緒に入ろう」
「入るかっ!!」
？ごねるアカメをさっさと追い返した。
？多分一緒に入ったら食われるんだろうなって何となく分かる。

？アカメにも困ったものだなあと頭を悩ませていると、今度は後ろから声がかかった。
「・・・・・・タツミ」
？振り返ると、紫髪の女性シェーレが穏やかな笑みで立っている。
？・・・・・・すっごい怖い。背筋凍る。笑ってるのに笑ってない。
？怒気、いやもうこれは殺気か、そんなものを発している。
？この様子はずっと見られてたやつだ。
「あ、そんなに怯えないでください。タツミには一切非はありませんから」
？恐怖に慄く俺に気を使ってくれた。
「・・・・・・あの雌タツミが困ってるのに擦り寄ってきて挙句の果て頭まで撫でてもらって私だってして貰いたいのに本当に卑しい雌で

すね神聖なタツミが汚れちゃうから触れないでと何度言えば分かるのでしょうそろそろ駆除した方がいいですねえそうしましょうきっとタツミも褒めてくれますそしたら私が頭を撫でてもらって他の雌じゃなくこの私が・・・・・・うふふ、うふふふふふ♡♡♡♡♡♡」

？急に呪詛のような呟きをボソボソと小声で垂れ流し始めたかと思うと次は笑いだした。

？聞こえなくて良かった内容だろう。

？完全に自分の世界に入ってしまったシェーレさん。このまま放置しておくと何をしでかすか分からないため、取り敢えず頭を撫でておこう。

「ええ!?そんなっ、きゅうにっ・・・・・・んきゅうううう♡♡♡♡」

？もう撫で技術が限界突破しているのかもしれない。

？それぐらい即落ちした。

「あぁぁ♡♡タツミいい♡♡〜〜っっ♡♡♡いえ、タツミさまあ♡♡♡♡ごしゅじんしゃまあ♡♡♡♡おしおきっ♡♡このいやしいめしゅ犬に、おしおきくださいいいい♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡」

？この組織、大丈夫なんだろうか・・・・・・。

帝具が暴走して好感度カンストしちゃった？マイン、レオーネ

？どうもタツミです。
？後ろの影からシェーレさんが発情した目で見ていますが無視して読書に励んでいます。
『ストーカー被害にあったらすべき１０のコト』という本を上から下までじっくり熟読する。
「ただいまー」
？ドアが開かれる。
？背の低いピンク髪のツインテール。
？今度帰ってきたのはマインだった。
「ふぅ、流石に偵察任務だと時間がかかるわね」
？マインは顔が割れていないため、街中の偵察をよく任されるのだ。
「お疲れ様マイン、お菓子あるけど食うか？」
？任務も何も無い俺は、申し訳なさと労い半々でお菓子の積まれたお椀を差し出す。
「ふふ、ありがと」
？・・・・・・なんだこの優しいマインは。
？マインが俺と並ぶようにソファーに座る。
？やけに近い。というか左半身をさすりつけてきた。
？後頭部に殺気が刺さる。
「何を読んでたの？」
？手元の本を覗き込んできた。
？その際俺の胸板にほっぺをスリスリするのも忘れない。
「ストーカー被害？・・・・・・ああ、アイツか」
？ここら一帯の温度が急激に下がる。
？なのに冷や汗はダラダラだ。
？汗の匂いを異常な嗅覚で感じとったマインが俺の胸に顔を埋めた。
？数回の深呼吸の後、うっとりと目じりの下がった表情で出てくる

と、流れるように彼女の相棒スナイパー〈浪漫砲台パンプキン〉を構える。
？銃身の先には鬼の形相で奥歯を噛むシェーレさんが、大バサミ〈万物両断エクスタス〉を揺らりと開いて応戦の姿勢をとっていた。

？態度的に見れば、マインは好感度爆上がり勢の中でも理性は保てている方、と一見感じるが、全然全くコレッぽちもそんなことはない。
？何故なら、彼女は重度の妄想癖なのだから。
「私の運命の人に手を出したこと、後悔させてあげるわ！」
？彼女が言うには、俺たちは前世で夫婦だったらしい。もう意味がわからん。
「ご主人様に汚い手で触れたご主人様に汚い手で触れたご主人様に汚い手で触れたご主人様に汚い手で触れたご主人様に汚い手で触れたご主人様に汚い手で触れたご主人様に汚い手で触れたご主人様に汚い手で触れたご主人様に汚い手で触れたご主人様に汚い手で触れたご主人様に汚い手で触れたご主人様に汚い手で触れたご主人様に汚い手で触れたご主人様に汚い手で触れたご主人様に汚い手で触れた・・・・・・」
？マインに対して同じ量の狂気で答えるシェーレさんもどうかと思うよ。
？マインがパンプキンにエネルギーを貯め始め、シェーレさんが足に力を込める。
「いやアジト壊す気か！」
「あうっ！」
？マインの脳天を引っぱたいて中断させた。
？これでアジト壊滅なんてなったら洒落にならん。ボスにすっごい怒られる気がする。
「えへへ、タツミにぶたれちゃった～」
？マインが心底嬉しそうに打たれた箇所をさすってはしゃぐ。
？もう俺にはお前が分からんよ。
「ずるいずるいずるいずるいずるいずるいずるいずるいずるい

ずるいッツッツ!!!!!」
？シェーレさんがエクスタスを振りかぶった。
？マインは打たれたことに飛び跳ねて気づいていない。お前本当に暗殺者？
「シェーレさんストップ！」
「くぅ～ん・・・・・・」
？俺の一喝でシェーレさんの殺気が一気に鎮火する。
「で、でもご主人様！その雌ご主人様に迷惑かけましたよ!?それどころかお仕置(ごほうび)まで！」
？信じられるか？この二人一か月前までコンビ組むくらい仲良かったんだぜ？
？恐るべしカーマデーヴァ。非人道的が過ぎるぜ。
「いいからシェーレさん、ステイステイ」
「くぅぅぅ・・・・・・」
？シェーレさんが目じりに涙を浮かばせて頬を膨らませている。
？そして次の瞬間には物陰へと消えてしまった。
？シェーレさんは一度拗ねると数日出てこない。
？何か危害を加えてくるという訳ではないからいいっちゃいいんだが。
？じっとタンスの中やら物陰やらから俺だけを凝視してくるのだ。数日間一度も目を離すことなく。
？飲まず食わず不眠不休の執念は、流石に恐怖を感じてしまうというものだ。
「なあ、もっと仲良くできないのか？」
？俺の腕に上半身を押し付けてくるマインに問いかけた。
「別に仲が悪いわけじゃないのよ？むしろ全然いいわ。一緒に任務よく行くし・・・・・・ただ、貴方のこととなるとそれは別問題でしょ？」

?いわく恋情と友情の優先順位だとか。
?よく分からん。
「まあいいや。風呂入ってこい」
「一緒に入る?」
「入るかっ!」

?■■■

「たっだいまー!」
?ドアが弾かれたように開いた。だから強いって。
?金髪おっぱい姉御ことレオーネ姉さんが買い出しから帰ってきたようだ。
「そしてタツミ成分ほきゅ〜う」
?ソファーに腰掛ける俺の膝に豊満な胸を乗せ、腹に鼻をつけてきた。
「すぅ〜〜〜〜〜〜ッッ!!?」
?今日は色々なことがあったから少し汗をかいてしまっていたのだ。
?それがレオーネ姉さんには大変お気に召したようで、腕を回して俺の腰をロックしてきた。
「うぁ――すぅ〜、んんっ♡♡・・・・・・すぅ〜、はぁ〜、すぅ〜、んぁぁぁ♡♡♡♡」
?俺の膝に寄りかかりながら蕩ける様子は正直エッチ。とてもエッチ。
?しかし唐突にレオーネ姉さんの動きは止まる。
?そして次第に頬が上気していき、呼吸も荒くなっていった。
?これはまた変なこと思いついたな。
?以前にも数度同じような兆候があったが、大抵碌でもない内容だった。
?そう今も正しく、レオーネの頭の中では、

?ふ、普通の状態でこんだけヤバい匂いなら、も、もし帝具で半獣化したら・・・・・だ、ダメだダメだダメだ!そんなことしたら一発で戻れなくなる!これ無しじゃ生きて行けなくなっちゃう!・・・・・・・・・・・・うぅ、でも、いい匂いだよぉ♡♡

?なんてことを考えていた。

?レオーネの中で激しいせめぎ合いが起きている。

?この状態で満足するか、半獣化で嗅覚を強化するか、葛藤の末勝利したのは・・・・・・、

「・・・・・・変身〈ライオネル〉」

?急にその名を呼び放ったかと思えば、レオーネ姐さんの身体が変化した。

?髪が伸び猫耳が生え、犬歯が異常発達する。両手も鋭い鉤爪を帯びた猛獣のそれになり、最後は可愛らしい猫のしっぽができた。

?可愛らしい猫を思わせる見た目、しかしその威圧感、風格は、猫という言葉では表現出来ない。正に、百獣の王ライオンの姿だった。

?え?急に帝具使ってきたんだけど。俺殺されるの?

?帝具〈百獣王化ライオネル〉を発動したときのレオーネ姐さんは、パンチで人に風穴を開ける。

?猛獣が腰に巻きついている。ちょっと力加減をミスれば殺される状況だ。

「よ、よし、いくぞ・・・・・・・」

⁉何を行くの?・え?・俺逝くの?

!!すぅぅぅぅ~~~~・・・・・・・・・・・・ツんぐぅツツツツツツ!!?!!!???!!!?!?」

!?もう訳分からんこれ。

!!あ・・・・・ぁはあ、あはははぁ、しゅごっ、これぇ、すぅぅぅぅ~~~~♡♡♡・・・・・ぁあああぁあぁあぁあぁあぁ♡♡♡♡すぅぅぅぅ~~~~♡♡♡♡♡・・・・・んぎぃいぃいぃ♡♡♡♡♡♡♡♡」

?暫くレオーネ姐さんは吸って悶えて吸って悶えてを繰り返してい

た。
「かひゅっ、すううう〜〜〜〜、おぐっ♡♡すううう〜〜〜〜♡♡♡♡すううう〜〜〜〜すううう〜〜〜〜・・・・・・」
?やがて体力の限界が訪れ、ただただ無言で吸い続けるだけとなる。
「す、凄かったぁ♡♡タツミの匂いぃ♡♡♡♡ありがとうタツミいい♡♡」
?蕩けきった顔でお礼を言われるが何が何やら。
「ふう♡満足♡じゃ、そろそろ・・・・・・あれ?足が動かない?」
?レオーネ姉さんの声に釣られて見ると、確かに下半身がやけにぐったりしている。
「あ、あれ〜?腰、抜けちゃったかも・・・・・・」
?レオーネ姉さんの頬が引き攣る。
?身をよじるが上手く俺の膝から抜け出せていない。
?ちなみに余談なんだが、俺の足には体温の高いレオーネ姉さんが寄りかかっている。当然少し汗をかく。そして蒸れる。レオーネ姉さんが動くと、当然濃縮された汗の香りが一気に解放される訳だ。
「・・・・・・え?ちょっと待って待って待って、なんか来る!凄いの来てる!!」
?微かにそれを感じとったのであろうレオーネ姉さんが、焦りと期待がない混ぜになった表情になる。
「だ、だめ。逃げなきゃ。食べられちゃう!私ライオンなのに、タツミに食べられちゃう♡」
?徐々に期待の度合いが強くなってきたのか、言葉じりが甘くなった。
「あ、あああ、来る、来る・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜ッッッッッッッッッッ♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡きったぁ♡♡♡♡♡♡」
?この世の快楽物質全てを凝縮したような凶悪な匂いが、レオーネ姉さんの脳天へと突き抜けた。
?身体がガクガクと痙攣する。
「んひゅうううう♡♡♡♡♡♡♡これっ♡♡やっば♡♡♡♡♡♡

頭、おかしきゅなるっ♡♡♡♡食べられちゃうぅぅぅ♡♡♡♡♡♡♡♡・・・・・・あ、あれ♡♡抜け出せにゃい♡♡♡♡こ、腰抜けてっ♡♡ヤバい♡♡捕まってる♡♡♡♡タツミに捕まってるぅぅ♡♡♡♡」

？余りに強烈な匂いに、レオーネ姉さんの腰は抜け続ける。

「おかしきゅなるぅぅぅぅ♡♡♡♡ダメだよぉぉぉぉ♡♡♡♡♡♡♡ごめんなしゃいいいい♡♡♡♡ゆるひてっっ♡♡♡♡たべにゃいでぇ♡♡♡♡♡♡タツミっ♡♡タツミぃ♡♡♡♡♡負けでいいからっ♡♡♡♡レオーネの無様敗北でいいからっ♡♡♡♡ごめんなしゃいするからっ♡♡♡♡♡♡♡♡たしゅけてぇぇぇぇぇぇ♡♡♡♡♡♡♡♡♡」

？一際大きく叫んだかと思うと、レオーネ姉さんはパタリと倒れる。

？気絶してしまったようだ。

？この人一人で何やってんだ。

？勝手に匂いを嗅いできて勝手に興奮して勝手に何かに負けて勝手に意識失ったレオーネ姉さんに困惑しかない。

？・・・・・・取り敢えず風呂はいってこよ。

？俺ってそんなに匂いキツいのだろうか・・・・・・。

？ちなみにその後、レオーネはタツミとすれ違うときの微かな匂いでさえあの時の記憶が蘇り、一人悶絶する日々を過ごした。

定例会議?・ナジェンダ、ラバック、ブラート

?・ナイトレイドのアジト。その一室で、タツミ、ラバック、ブラート、ナジェンダが机を囲っていた。
「ではこれより、定例会議を始める」
?・ナイトレイドのボスであるナジェンダが緊張感ある声音で言い放つ。
?・〝定例会議〟、元々はナイトレイド全員で現在の課題と今後の方針を話し合う会だったのだが、アカメたちがあの調子になってからは、タツミ、ラバック、ブラート、ナジェンダの正常組での会議へと変わった。
「まず私より〈カーマデーヴァ〉の修復方法だが、現状はまだ見つかっていない。如何せんタツミの身体から取り出すこともできないため、革命軍も手を焼いているのだ。すまんが今暫く我慢してくれタツミ」
「いや全然大丈夫です。元はと言えば俺のせいみたいな所ありますし」
?・申し訳なさそうな眼差しを向けてくるボスに首を振る。
?・すると横のブラート(兄貴)が口を開いた。
「別にタツミのせいじゃねーよ」
「あれは事故だ事故」
?・続けざまにラバックも首肯する。
「みんな・・・・・・」
?・最近仲間割れしかしない奴らの中心にいたからか、仲間を気遣う心というものに感動してしまった。
「では次に、タツミから最近のアカメたちの様子を聞こうか」
?・三人の視線が集まる中、俺は最近の様子というものを思い出してため息をこぼした。
「アカメは任務がある時は一瞬で終わらせて俺に褒めて貰おうとしてくるな。休みの日は料理作って褒められようとするんだけど量が多すぎて食いきれねえ。
シェーレさんは・・・・・・数日前に拗ねてから見てないな。まあ

今も視線は感じるからどっかから見られてることは確実だけど。
マインは妄想に磨きがかかってきて、宇宙の創成と俺の関係性を熱く語ってきた。
レオーネ姐さんはなんか最近すれ違う度腰が抜けてんな。これは俺も何でかわからん。
あと最近一番困ってるのがアジト内での乱闘で帝具を持ち出すようになったことだ。いつ死ぬか気が気じゃない。特にアカメのやつ」
？一通り話終えると会議には重苦しい沈黙が訪れた。
「まあそこは厳重注意をするが・・・・・しかし、あれだ、一つだけこの状況で良くなった点を上げるとしたら、アカメたちの戦果が著しく上がっていることだな」
？確かに彼女達の近頃の仕事ぶりには鬼気迫るものがあった。
？今までは戦闘を楽しむきらいがあったレオーネも、タツミと早く会いたいからと一撃で対象を仕留めて帰ってくるのだ。
？何とか場を盛り上げようと苦し紛れに出た意見ではあるが、そこそこに価値のあるものではあった。
「はあ、やはり解決は当分かかりそうだな。特にタツミには苦労をかけて申し訳ないが、今は要観察を続けるしかない状態だ。私も何とかならないか探してみるので、皆も頼む。では次の議題だが――」
？大した実りもないままカーマデーヴァの議題は終わってしまう。
？解決策は明確で、カーマデーヴァを直すこと。しかしそれが何よりも難しい。
？頭を抱えるには充分過ぎるほど難しい問題だ。

？■■■

「お前も大変だなー」
？会議終了後廊下を歩いていると、途中でラバックに声をかけられる。

「なんか息抜きになる本でも貸してやろうか？」
？謎にニヤけ顔をして肘でつついてくる。
「どんな本があるんだ？」
「おお！興味あるか。俺のイチオシ本を紹介してやる。・・・・・・タイトルは『おっぱ――」
？その単語を口に出そうとした瞬間、背後からナイフが飛び出して、ラバックの頬を掠めた。
「――今、ご主人様を汚そうとしましたか？」
「・・・・・・あ、あはは。よ、用事を思い出しちゃったー」
？頬をひきつらせながらラバックがそそくさと撤退する。
「あ、シェーレさん」
「ご主人様、こんにちは♡」
？シェーレさんが物陰から出てきた。
？数日ぶりに目を合わせる。
「・・・・・・今日も、あの女の所に行くんですか？」
「まあな」
？〝あいつ〟のことを思い出すと、どうしても気持ちが沈んでしまう。
「ご主人様の行動に口出しはしませんが、警告しておきますね。あの女、気をつけた方がいいですよ。どうにも、勘が騒ぎます」
「え？」
？シェーレさんが珍しく神妙な顔つきで答えた。
？〝あいつ〟が、危険？
「では私はこれで失礼します。くれぐれもお気をつけて」
？シェーレさんはそれだけ残すと再び物陰へと消える。
？シェーレさんの真意を探ろうと頭を巡らすが、やはり答えには辿り着けない。
？そうこうしてる内に、アイツの部屋の前に着いた。
？疑問符を浮かべたまま、俺はアイツの部屋の戸を叩く。
？中から「どうぞー」と元気な返事が届いたのを聞き、ドアを開く。
？アイツが、ベットの上に座っている。

？艶のいい長い黒髪と、同色の瞳。
？俺が来たと気づいた途端、花が咲いたような無邪気な笑みを浮かべてくれた。
？本来、こんな幼い印象は受けぬ筈の相手。
？記憶の中の彼女は、もっと凛々しい存在だった。
？それでも彼女がこうなってしまったのは、あのクソ貴族のせい。
？アイツらの薬のせいで彼女の成熟した心は粉々に砕かれ、幼児のものへと変貌してしまった。
？込み上げてくる吐き気を悟られないように無理に口角を引きあげて、俺は彼女に声をかける。

「こんにちは、サヨ」
「うん、こんにちは！おにーちゃん！」
？その笑顔が、また俺の心を抉る。

好感度カンスト済みだった

「おにーちゃん、だいすきー♡」

？俺がベッドに腰かけると、サヨはあどけない笑顔で抱きついてきた。

？とても満足気な笑顔に心が洗われると共に、チクリと痛む。

？変わってしまった幼馴染。この姿こそが、俺の帝国への恨みの象徴だ。

「えへへー、おにーちゃん♡おにーちゃん♡」

？溢れんばかりの笑顔に、俺は故郷を出てからのことを思い出していた。

？あの悲劇のことを。

？辺境の村で生まれた俺たちは、いつも幼馴染三人で駆け回っていた。

？狩りの仕方や剣の扱いも共に学んだ。

？そして帝都で軍に入り、名を挙げて貧しい故郷を救うんだと意気込んで村を出る日の朝、最初の悲劇は起きた。

？幼馴染の一人、イエヤスが食中毒にかかり一緒に行けなくなっちゃった。

？もう食中毒は治ったのだろうか。心配だ。

？早くも一人の仲間が欠けてしまった俺たちは、それでも帝都を目指す。

？時間が経てば経つほど故郷は貧しくなる一方なのだ。

？そしてその夜、野宿をしている時に二つ目の悲劇が起きた。

？盗賊に襲われた。

？何とか逃げきれたものの、俺はサヨとはぐれてしまう。

？仕方なく一人で帝都に向かい、その後合流しようと思った。

？三つ目の悲劇は帝都に着いた直後の出来事だ。

？有り金全部盗られた。

？もう散々過ぎる。

？その時たまたま会ったレオーネ姐さんに、騙されてお金を全てぶん盗られた。
？故郷の人がどんだけ頑張って集めたと思っているのだろうか。
？思い出したら腹たってきた。この事についてまだ何も謝られてないし。
？後で抗議しに行こう。
？そして最後の悲劇、最大の悲劇。
？サヨが、薬漬けにされていた。
？路頭に迷っていた俺はたまたま通り掛かった貴族に拾われ、護衛の職を貰った。
？しかしその貴族は、俺のような何も知らないガキを騙して雇い、地下室で拷問することが趣味のバイオレンス一家だったのだ。
？ある夜、その糞貴族をナイトレイドが襲撃する。
？襲撃時の俺は、貴族の娘の護衛をしていたが、そこで地下室を目撃、その中には鎖で拘束されたサヨがぐったりとしていた。
？すぐさま護衛対象を首ちょんぱしてサヨを助けるが、意識不明の重体。その貴族は、表に出回っていない凶悪な薬をサヨに飲ませたらしい。
？連れ去られたナイトレイドのアジトで、何とか一命を取り留めて目を覚ましたものの、ご覧の通り幼児退行してしまっていた。

？以上が今までの流れだ。
「おにーちゃん、ぎゅってしてー♡」
「お、おう」
？子供の頼みは断れないが、体つきに成長が見られるためドギマギしてしまう。
「ぎゅー♡」
「は、ははは、よしよし」
？この子は子供この子は子供この子は子供。
？煩悩退散しよう。サヨは妙に勘のいいところがあったから、劣情を抱けば直ぐにバレてしまうかもしれない。

？子供をあやすイメージを脳内に巡らせながら撫で回す。
「――んっ、はぁ♡すごっ♡」
「え？」
？一瞬サヨから子供の雰囲気が抜けた気がした。
「う、ううんなんでもないよ。おにーちゃんのナデナデすきー」
「そうか？ならもっとやってやる」
？ちょっとサヨの幼児退行を治す兆しが見えた気がしたんだが、気の所為だったようだ。
「んひゃっ♡も、もっとー、ナデナデもっとー♡♡」
「サヨは本当に撫でられるの好きだな」
？サヨを撫であやしていると、後ろのドアが開かれた。
「タツミ、入るぞ」
？機嫌が悪いのだろうか、アカメは返事すら待たずにドアを捻る。
？てかここサヨの療養室なのに俺に入室許可求めるのどうなんだろうね。
？アカメは無表情で入ってきたが、気持ちよさそうに撫でられるサヨを一瞥し、微かに眉を顰める。
「・・・・・・おにーちゃん、ぎゅーして？」
？明らかに刺々しいオーラを放つアカメなど気にもとめず、サヨは以前甘えん坊モードでねだってくる。
？勘の良さどこ行ったんだよ。いやぎゅーするけど。
「ん～～♡♡」
？本当に幸せそうに喉を鳴らすサヨに、こっちまで嬉しくなってくる。ギャップ萌えというものも働いているのだろう。
？治したいよ？幼児退行治したいけどね？・・・・・・でももうちょっと幼女サヨ堪能したいじゃん？
「・・・・・・フッ」
？サヨが小さく鼻を鳴らした。いや、今のはむしろ鼻で笑ったという感じな気がするが・・・・・・幼女サヨがそんなことするわけねえか。
「ッ!!」
？暫く抱き合ったまま動かずにいると、背後で奥歯噛み砕いたんじゃ

レベルの歯ぎしり音が響く。
?疑問に思いサヨを離すと、アカメが鬼もかくやといった表情で睨みつけてきていた。チビりそう。
「あれれー?アカメさんお顔がこわいけどどうしたのー?」
「・・・・・・タツミ、少し出ていてくれないか?」
?急に火花を散らし始める二人。これが女の戦いというものだろうか。
「ま、まあいいけど」
?流石にアカメも病人には手を出さないだろうと部屋を後にする。
?あの場には男が居てはいけない雰囲気だった。別に怖かった訳では無い。
「お?タツミじゃねえか、どうしたんだ?」
?通りすがりのブラートの兄貴。
「いやあ、女の戦いから追い出されちゃって」
?苦笑いで答えると、兄貴は考える素振りをしてから不敵に笑う。
「タツミ、お前最近ストレス溜まってるだろ。俺が発散させてやるよ。男同士の戦いってやつだ」
?兄貴がいい笑顔でにじりよってくる。

?この後めちゃくちゃ腹筋腕立てした。
?盛り上がって模擬戦までやってたらマインに見つかってとんでもなく怒られた。マインこわい。

?■■■

?タツミが去った部屋で、サヨとアカメは激しく殺意をぶつけ合っていた。
「お前、幼児退行などしていないだろう」
「あれ、バレちゃった?」

?タツミが聞けば度肝を抜かれるであろうアカメの問いに、サヨは隠す気もなく呆気からんと返す。
?先程までの構ってちゃんな雰囲気は霧散し、言葉には酷く理知的な光が宿っていた。
?しかし反対にその双眸に光は無く、ドロリとした〝黒〟が渦巻く。
?アカメはその異常性を敏感に感じとる。
?ほんの少し前は人畜無害な振る舞いだった女に、全神経を使い警戒を敷く。
?・・・・・・強い。
?恐らく、互角。
?殺意を交錯させたからこそ分かる相手の力量。
?アカメの本能は目の前の女を己と同等の敵だと告げる。
?これはサヨしか知らない事実だが、彼女は生まれた時から才能の塊だった。天才などという生半可なものでは無い。怪物と恐れられる類いの才能。
?彼女が五歳になった時、村一番の剣士と名高い男の剣技を全て見切っていた。恐らく戦いになれば、一瞬でカタが付いただろう。
「いやーにしても運が良かったなー。まさかこんな形で夢が叶うなんて」
?サヨには一つ夢があった。
?ずっとずっと昔、それこそ幼少期と呼ばれる時代からの夢。
?〝タツミの妹になって甘えまくりたい〟
?一見すると馬鹿な夢だが、二見しても馬鹿な夢だ。
?だが彼女には、とんでもなく大きな野望。
?最初こそ小さな夢、小さな恋心だったのだが、時を経て想いは降り積もっていき、やがてその蓄積は〝病み〟と称される高みまで辿り着いてしまった。
?守ってもらうために自分を弱く見せた。力を大幅に抑え続けた。
?しかし、全ての行動の要因がタツミ主体のものと変わっても、野望が身を結ぶことはない。ただ仲のいい幼馴染として見られる日々が続くだけ。

?運命の転機はきっとあの時。
?帝都に向かう道すがら、盗賊に襲われタツミとサヨは分断された。
?タツミの前では力を見せる訳にはいかないサヨは、やむ無くその別れを許す。
?その後タツミが完全に離れきった瞬間、盗賊全員を数秒で片付け、悪態をつきながら帝都に足を進めた。
?途中、貴族の馬車と出会う。
?馬車から出てきた貴族は柔和な笑みで帝都まで送りましょうかと尋ねてきたが、サヨはその笑顔の歪みと、消しきれぬ血の香りに気づく。
?明らかに良くないことを企んでいる。
?そして、サヨは神がかり的な妙案を思いついた。
?攫われたら、助けに来てくれるのでは?
?助けられた時幼児退行してるフリすれば、妹と扱ってくれるのでは?
?サヨは嬉嬉として馬車に乗り込んだ。
?その後色々拷問されるが、精々汚れが付くくらいで傷一つつかず、劇薬と紹介された薬を苦もなく耐えきり、無事作戦は成功、彼女の夢は果たされたのだった。
「だからあんまり邪魔しないでくれるかなー?ウザイんだよねお前ら。後から出てきておにーちゃんに擦り寄ってさー」
「その性格をタツミにバラしてやろうか?」
「ハッ、勝手にどうぞー?でも優しいおにーちゃんはサヨのこと疑ったりしないから」
「・・・・・・」
?バッチバチの火花が暫く散っていた。

これ俺の村のしきたりだから

?タツミがブラートの兄貴との熱い筋トレを終え浴場で身体を流している頃、一人の女性がフラフラと覚束無い足取りで更衣室の扉を開けた。

?彼女の視線の先には、タツミの汗がたっぷりと染み付いた練習後のシャツ。

?ゴクリと大きく喉がなる。

?その姿はまるで、食虫植物の甘い誘惑に誘われた、哀れな虫を想起させるものだった。

「はァ、はァ、はァ♡」

?荒い獣の呼吸を繰り返して、金髪の女性レオーネは葛藤する。

?さ、流石にこんな事したらタツミに嫌われるんじゃないか？い、いやでもこんな凄い匂いを無視しろなんて生殺しだ！

?脳内で天使と悪魔が口論している最中、既にレオーネの腕はシャツに向かって伸びていた。

?頭では否定しても、身体はもう目の前に置かれた極上のスイーツに囚われている。何もせずに去るなどできないことは明白だ。

?そ、そうだ！元はと言えばこんな匂い醸し出すタツミが悪いんだ！誘ってるじゃないか！

?思考も暴論で自己保身を固める方向にシフトし、レオーネは口を開いた。

「変身〈ライオネル〉」

?半獣化、嗅覚が急激に強化される。

?と同時に、レオーネは膝から崩れ落ちた。

「――んくぁっ♡♡♡」

?まだシャツとは距離があるが、それでもこの有様。

?意識がタツミの色で染め変わる。

?件の記憶がじわりと脳に染み込むように蘇った。

?・・・・・・また、頭をぶっ壊されたい。

?タツミの匂いに脳ミソ掻き回されて、何が自分かも分からなくされ

て、
?そして、
?そしてまた、敗北宣言をしたい
?歪んだ欲望が次々に湧いてくる。
「タツミぃ♡タツミぃ♡」
?最早腰に力は入らず一歩としてタツミのシャツに近づけない。動かない身体をもどかしく思いながら、うわ言のように愛しの名前を呟き続ける。

「――え?何やってんのレオーネ姐さん」
?風呂上がりのタツミと、鉢合ってしまった。

?■■■

?俺が風呂から出たら、レオーネ姐さんが俺のシャツに手を伸ばしながら更衣室にへたりこんでいた。
?何を言ってるのか分からねえと思うが、俺はだいたい察した。
「た、タツミ!?これは違うぞ?私は無実――ちょっと待ってタツミの裸ヤバい・・・・・」
?言い訳すらままならない様子。
?タオル巻いてて良かったと今日ほど思ったことは無い。
?洒落にならない量の鼻血を零しながら、レオーネ姐さんが凝視してくる。
?ライオネルで変身していることも相まって、猛獣に睨まれた気分だ。
?恐怖に竦んでから不意に思い出す。
?この状況で責められるべきは確実にあっちであり、また俺にはレオーネ姐さんに金を取られた恨みがある。
?その恨み、ここで果たすことも可能だ。

?再びレオーネ姐さんへと目を向ける。今にも飛びかかってきそう。
?・・・・・・やっぱ怖くね?
?今は一匹の発情したライオンに食われる寸前。
?正直恨みを一旦忘れて逃げ出したいが、あちらは理性のタガなどとうに外れている。背中を向けた瞬間、飛びかかってくるだろう。
?腹を括るしかない。
?ここで怖気づいていたら一生恨みを返せないぞと脳内で繰り返す。
?目の前の猛獣に、自ら一歩踏み出した。ゆっくりと、隙を見せないように。
?顔を真っ赤に紅潮させるレオーネ姐さんの間合いに入る。

?緊張の一時。

?レオーネ姐さんが、微かに鼻を動かした。
「ふぁっ♡♡」
?目尻が垂れ一瞬俺への意識がブレる。
?瞬間弾かれたように飛び出した。
?普段なら軽く捻られるであろう攻撃も、今なら当てれる。
「トウッ!」
?レオーネ姐さんに飛びついて組み伏せた。
?仰向けに倒されるレオーネ姐さんは、背中から落ちた衝撃で理性が戻ってくる。
「え?タツミ?・・・・・・っ!?ちょ、は、はだ――」
?よし、何とか拘束には成功したぞ!

?・・・・・・え?この後どうすんの?

?恨みを返すって具体的に何をやればいいのだろう。
「裸だ♡タツミの裸♡凄い・・・・・・ふあ♡え、何この匂い。すごい、

あったかい・・・・・・・♡」
?・・・・・・・恨みを返す。つまりお仕置すればいいのかな。
「汗の強い匂いじゃなくて、風呂上がりのタツミの優しい匂い♡
あぅぅ♡♡こっちもすきぃ♡♡」
?俺の故郷には、お仕置きといえばコレ。というものが一つある。
?仰向けに押し倒したレオーネ姐さんの上から一旦退く。
?一応腕は抑えているが、何故だかレオーネ姐さんは上の空状態なのでいらない気もした。
?というかろくに抵抗してこないな。
?俺は正座をして、その上に今度はうつ伏せにしたレオーネ姐さんの腹を乗せる。
「タツミぃ♡もっと優しい匂い頂戴♡」
?ぶっちゃけ何を言っているのか理解できないが、しかし反省していないことは伝わった。これはお仕置しなければ。
?大きく右手を引き絞る。
「タツミ?」
?ようやく俺がいつもと違う雰囲気なのを感じとったか、だがもう遅い。
?俺は思いっきりレオーネ姐さんの尻を引っぱたいた。
?すなわち、おしりペンペンである。
「フンっ!!」
「んぎぃッッ!!?」
?苦悶の声が響く。
「フンっ!!」
「あぐッッ!!?」
「フンっ!!」
「ひぎゅッッ!!!」
?二度三度、四度五度と続く。しかしその程度では終わらない。俺の故郷では百回やるのが通例だ。
「た、タツミっ、ゆるひて・・・・・・」
「フンっ!!」

「いぎぃぃぃぃ!!!??」
「許して欲しい時はなんて言うんだ？」
「ご、ごめんなさい！ごめんなさい！」
「それでいい！フンっ!!」
「んんん～～ッッ!!!なんでぇー!?」
？レオーネ姐さんが涙を浮かべて抗議してくる。しかしここは心を鬼にして続行だ。
「謝って済んだらナイトレイドいらねえんだよ！フンっ!!」
「あぐぅぅぅぅ!!!ごめんなしゃぃぃぃぃ!!!」
？チンピラを演じるのがおしりペンペンのコツだ。
？乾いたビンタ音と、レオーネ姐さんの悲鳴がこだまする。
？しかしその声は、おしりペンペンが十五を超えたところで変化を迎えた。
「フンっ!!」
「ごめんなさいっ♡」
「フンっ!!」
「ごめんなさいっ♡♡」
？彼女の悲鳴は、徐々に甘さが混じり嬌声に近くなっていた。
「フンっ!!」
「ごめんなさいぃ♡♡・・・・・なにこれ♡♡・・・・・・お尻ジンジンすりゅの、ちょっと、きもちぃ♡♡♡」
？微かにだが、レオーネ姐さんはこの行為に快楽を得始めたのだ。
「フンっ!!」
「ぁあっ♡ごめんなしゃぃ♡♡♡・・・・・だめ♡どんどん気持ちよくなる♡♡これだめなやつ♡♡♡に、逃げ――」
「フンっ!!」
「ごめんなしゃいいいいいいいぃ♡♡♡」
？逃げ出す素振りを見せた瞬間一際強く叩く。こうすることで逃げたらもっと辛いと刷り込んでいくのだ。
？そんな極悪非道な行いに引っかかってしまったレオーネ姐さんは、身をよじるなどの行為を止めた。

?それでも助けを求めて、手だけは前に伸ばす。
?しかしいくら伸ばしてバタつかせても、結局そこには誰もいない。助けなどなかった。
「フンっ!!」
「ごめんなしゃいっ♡♡♡♡」

?だがなんと、無意味だと思われた腕を伸ばす努力は、とある事象を引き起こした。
?レオーネ姐さんにとって、最悪と最高とも取れる事象を。
?懸命に助けを求める手のひらが、俺の訓練後の服が脱ぎ捨てられたカゴに当たった。
?ひっくり返り、汗を吸ったシャツがレオーネ姐さんと地面の間に滑り込む。
「〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜ッッッッッ!!!????」
?声にならない叫びが飛んだ。
?彼女の頭の中では快楽の花火が弾けていることだろう。
「フンっ!!」
「こぉあっ♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡」
?シャツとお仕置のダブルブッキング。
?訳の分からぬ気持ちよさに、視界は真っ白、体は痙攣。脳の許容量を遥かに上回り、意識はブツリと途切れる。
「フンっ!!」
「うぎゅひっっ♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡」
?しかし失った意識は俺の平手打ちの衝撃で引き戻された。
?目を覚ますと目の前には俺の訓練後のシャツ。そして絶え間なく襲ってくるおしりペンペン。
?また快楽のキャパオーバーで気絶、起こされる、気絶、起こされるの無限ループに陥る。
「ほら、謝罪は!?フンっ!!」
「あぎゅうっ♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡は、はひ♡♡♡♡ごめんなしゃいいっっ♡♡♡♡」

「フンっ!!」
「きゅにゅう♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡ご、ごめんな――」
「フンっ!!」
「あぎひぃぃぃぃ♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡ごめんなしゃいいいいいいいいい♡♡♡♡♡♡♡♡」
?時折意識がブツ切りになりながらも、喘ぎと共に謝罪を叫び散らす半獣化した女性と、その女性をおしりペンペンし続ける腰にタオルを巻いただけの男。どう見ても事件だ。
?しかし俺は気にせずお仕置を続ける。
?ひたすら無心で叩き続けるのだ。
?故郷でもそう教わった。変に情をかけてしまえば、味をしめてまた悪さをするかもしれない。どんなに謝っても泣いても、決して手を緩めてはいけない。
?俺は機械。無慈悲なおしりペンペンマシーンだ。
「フンっ!!」
「ごめんなしゃいいいいいいいい♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡」

?■■■

「九十七回目ぇ!フンっ!!」
「っ♡♡♡♡ごめんなしゃいいいいいいい♡♡♡♡♡♡♡♡」
「九十八回目ぇ!フンっ!!」
「ごめんなしゃいいいいいいいい♡♡♡♡♡♡♡♡」
「九十九回目ぇ!フンっ!!」
「あああ♡♡♡♡ごめんなしゃいいいいいいい♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡」
「百回目ぇ!フンっっっ!!!!」
「たちゅみごめんなしゃいいいいいいいいいいいい♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡」
?ようやく百回のおしりペンペンが終了する。

?レオーネ姐さんはぐったりとしつつも、尻に残る快楽の余韻と、鼻に直付けされたシャツの匂いで体を定期的に跳ねさせている。
「はぁ、はぁ・・・・・・んっ♡はぁ、タツミぃ♡タツミぃ♡」
?息絶え絶えという表現がベストマッチするような姿で俺の名前を連呼する。名前の連呼は彼女の求愛行動らしい。

「・・・・・・え?なんか終わった感出してるけど、まだ後百回あるからね?」

「・・・・・・・ぁえ?」
?何を驚いているのか。
?イタズラをして百回なのだ。人の金を騙し取るなんて犯罪行為、二百回でもまだ少ないと言えるだろう。
?それでも二百回で許してあげる慈悲を感じて欲しい。
「ほら続きいくぞ、フンっ!!」
「いぎゅうううう♡♡♡♡♡♡♡♡た、たちゅみ♡♡はなしが、ちがっ♡♡」
「謝罪はどうした!フンっ!!」
「んきゅうううう♡♡♡♡♡♡♡♡ご、ごめんなしゃいいいいいいい♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡」

?この後しばらく、甘さと苦しさを混ぜ合わせた嬌声が止むことはなかった。

「フンっ!!一九八!」
「♡♡♡・・・・・・ご、ごめん・・・・・・な、しゃぃ♡」
「フンっ!!一九九!」
「♡♡♡・・・・・・ご、ごめ、なしゃぃ♡」
「フンっっっっ!!!!!!二百!!!」

「♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡・・・・・・・・・ごめ♡・・・・・・・・・♡♡・・・・・・・・しゃ♡♡・・・・・・・♡♡♡♡♡」
？これにて、お仕置おしまい。
「♡♡♡♡♡♡」
？レオーネ姐さんは涙とヨダレで顔、そしてシャツをぐちゃぐちゃにしていた。
「・・・・・・レオーネ姐さん」
「っ♡♡♡♡ひゃぃ♡♡♡♡♡♡」
？俺の呼び掛けにビクリと身体を過剰に反応させる。
？ゆっくりとそんなレオーネ姐さんを労りながら起こした。
？そして静かに抱きしめてあげる。
？これも俺の村のしきたりだ。おしりペンペンの後、無用な悔恨や恐怖を残さない為に相手を抱きしめる。
「ふああ♡♡優しいタツミだあ♡♡♡♡」
？消耗の末腕を上げることすらも叶わないレオーネ姐さんは、必死に俺の胸板へ頬を押し付けてきた。
？頭を撫でてあげる。これもしきたり。
「それすきだぁ♡♡優しい匂いもすきぃ♡♡・・・・・・タツミ♡タツミ♡厳しいタツミも、優しいタツミも、どっちも大好きだぞ♡♡」
？よし、これで後に恨みが残ることはないだろう。
「・・・・・・それはそうとお金は返してね」
？まあこれは別問題だよね。普通にね。
「分かった♡♡私の全財産あげる♡♡」
「いやそんなにいらねえよ。俺が盗られたのほんのちょっとだぞ」
？極端過ぎるんだけどこの人。
「違うの♡♡私タツミに二回も手も足も出ず負けたから♡♡♡♡レオーネタツミに完全屈服しちゃったから♡♡♡♡♡私の物全部タツミに貢がなきゃいけないのっ♡♡♡♡♡♡♡」
？胸板から俺を見上げる虚ろな目が、その言葉は冗談ではないと告げている。

?俺は一旦レオーネ姐さんを置いて一人着替える。
?しっかりと服を着たら、超全力ダッシュで逃げ出した。
?だって怖いんだもん。

はじめてのにんむ？（デートとか言わないで）

「帝都の市政調査？」

「ああ、タツミも流石に帝都を知った方がいいだろう。任務がてら観光して来い」

？ナジェンダさんから外出を提案された。

「でも俺外出ちゃダメって決まりじゃなかったっけ」

？好感度上昇組から理不尽に言い渡された決まり。怖いから守るけども。

「ああ、それに関しては大丈夫だ。なんたって――」

「私がついて行くからね！」

？急にマインが扉を開けて出てきた。ずっと待機していたのだろうか。

？というかいつの間にか〝外に出ちゃいけない決まり〟が〝一人で外に出ちゃいけない決まり〟に変わってたんだが。絶対マインの独断だろう。

「シェーレとアカメは任務で留守だし、レオーネは昨日酒飲み過ぎて爆睡してるし・・・・・完璧ね！さあ、デートに出発よ！」

？デートって言っちゃったよ。

？■■■

「タツミ、あーん」

？任務ってなんだろう。

「・・・・・・」

「あーん」

「・・・・・・・・・・・・」

「あーん」

？マインオススメだというスイーツ店で、パフェを楽しんでいる。

?こういう場合対面して座るのが普通なんだろうが、マインは俺の隣に座り、肩と肩をくっつけてきた。
?そのせいでかなり浮いているが、目立っちゃダメなんじゃ?
「あーん」
「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」
?真横からクリームの乗ったスプーンを突き出してくるマインは、意地でもあーんを成功させる気だろう。
「・・・・・・あーん」
?埒が明かないので仕方なく応じる。
「〜〜っっ♡♡♡♡♡」
?そんな喜ぶ?
?そのままマインはスプーンを自分の口の前に持って行って、一度唾を飲む。そして意を決してスプーンを咥えた。
「ふわっ♡・・・・・・これ、いい!」
?パフェには目もくれず一心不乱にスプーンを舐め続けるマイン。そんな異常な姿にも特に驚かなくなってしまった自分に少し凹む。
「マイン、あーん」
「・・・・・・・・・・・・・・ふぇ!?」
?目を丸くしているがそんなに驚く事だろうか。
?そっちのパフェをくれたんだし、それに久しぶりに外に出してくれたお礼だ。家の中ばかりで流石に気が滅入りそうだったのだ。
「あ、あーん♡♡」
?マインはスプーンを握る俺の手を掴み逃げられないようにする。
?顔を紅潮させ息を荒らげる姿は、恥ずかしいというより発情しているように見えてしまう。
「はむっ」
?おっかなびっくりに俺のパフェを頬張ったマインは、なかなかスプーンから離れてくれない。
「んむっ♡れろ♡♡・・・・・・れぇ♡♡はァ♡はァ♡」
?スプーンを舐め回し最終的には唾液が橋のように糸を引いた。
?なんでお前いちいち扇情的にすんの?

「美味いか？」
「うん♡すっごく、幸せだわ♡♡」
？味の感想聞いたんだが。
？終始こんな調子なマインに諦めを抱きつつ、パフェを食べ進める。
？その間マインは俺のスプーンを見て興奮していた。

「次はどこに行こうかしら」
？マインが腕を組んで身を寄せてくる。
？スイーツ店を後にした俺たちは宛もなく街中をさまよっていた。
「・・・・・・マイン、なんか妙に騒がしくないか？」
？急に人通りが激しくなる。
？通り過ぎていく人の顔からは、確かな恐怖の色が見て取れた。
「恐らく公開処刑でしょうね。帝都ではよくあることよ」
？マインの言葉が届くが早いか、俺はソレを目にしてしまった。
？磔にされた数人の人間。至る所に矢が刺さっている。
？死ぬまであそこで苦しみ続けるのだ。
「な、なんて酷いことを・・・・・・」
？意識せず口から言葉が零れた。
「ああいうことを平気でやるのが今の大臣。世継ぎ争いで幼い皇帝を勝たせたキレ者よ」
？マインが、磔られ苦しむ人々を鋭い眼光で睨む。
「私は、あんな風にはならないわ」
？マインの瞳の奥で確かな決意が燃えていた。
「――私はねタツミ。革命を成功させて、その功労者として貴方と二人でセレブに暮らすのよ。」
？異様な雰囲気を纏ったマインがこちらに視線を向ける。
？・・・・・・勝手に俺が人生プランに組み込まれているんですが。
「タツミも私と暮らしたいでしょう？」
？絡められた腕が、一層強く締まる。
？恍惚とした、でも何処か歪な笑いを浮かべて、光無い双眸が覗き込

んでくる。
「あーんだってしてくれたものね♡タツミも私のこと大好きなのよね♡」
？クスクス、クスクスと、笑い声。
？何かがおかしい。
？マインの声が遠のいていく。
「これからはずっと、ずぅーっと一緒よタツミ？ふふふっ、タツミ♡タツミ♡タツミぃ♡♡」
？ボヤけた視界が回る。
？あれ？なんで地面が目の前に――――。

？■■■

？次に目を覚ました時はナイトレイドのアジトだった。
？ベッドの周りにはボスと好感度上昇組に加えてサヨまで来ていた。
？そして部屋の隅にマインが縄で縛られている。
「くっ、解きなさいよー!!アタシとタツミ恋路を邪魔するというのっ!?この！この！」
？マインが縄から外れようともがいているが、悪足掻きだ。そもそもの身体能力がそれ程高くないため、固く結ばれた縄はビクともしない。
「タツミ、眠らされる前のことは覚えているか？」
？ボスが心配そうな目で尋ねてきた。
「・・・・・・市政調査で公開処刑を見たところまでは」
「ふむ、ではその後の話からしようか」
？ボス曰く、俺があーんさせられた時、強力な睡眠薬も同時に飲まされていたようだ。あーんし返さなければよかったな。
？そして俺が眠った後、マインが俺を誰にも見つからない場所に運び

込もうとしたところを、突如現れたレオーネ姐さんにぶっ飛ばされたという。急展開過ぎる。
?レオーネ姐さんは朝起きたらアジトに俺がいないもんだから街中を探し回ったらしい。
?ちなみにもし公衆の面前じゃなかったら?ライオネル?を使って殴ってたとはレオーネ姐さんの談。
?以上が事の顛末。
「そこでだなタツミ、今後このようなことがないように、お前にはこれを渡しておく」
?ボスが懐から小瓶を取り出す。
?中に数個の丸薬が入った小さなものだ。
「こいつは革命軍が開発した試作品の対毒薬でな、大抵の毒なら何とかなる。猛毒にだってそこそこ効果を発揮するぞ。今回お前が早く起きれたのもこの薬のおかげだ」
?ボスが自慢げに話すということはかなり凄い薬なのではないだろうか。
「貰えませんよ俺戦闘に出ませんし」
「いやこいつには厄介な副作用があってな。毒を消した後めちゃくちゃ体が痺れるんだ。動けないほどではないにしろ、どの道まともに戦えん。実戦投入は現段階では不可能だな」
?言われてみれば微かに体の感覚が鈍い。服用してからも暫くは寝たままだったようなので、これでもかなり収まった方なのだろうが。
?毒を解除しても体痺れてたら殺されるか。いや、生け捕りとかの可能性が高まるからさらに酷い。拷問なんて考えるだけで身の毛がよだつ。
「そういうことなら貰っとくよ。ありがとう」
「ああ」
?ボスから薬を受け取る。使う機会が無いことを祈るばかりだ。
「それよりタツミー、マインとデート行ったんだろ?おねーさんとも行こうぜ」
?レオーネ姐さんが俺の顔を胸で押し潰してきた。

「そ、そうだタツミ！私も二人っきりでなにかしたいぞ！」
「私もですご主人様」
「おにーちゃん私もー♡」
？アカメ、シェーレさん、サヨも続く。
？今回の件でデートにかなりの抵抗ができたので遠慮したい。
「頼めるかタツミ？このままじゃナイトレイド内で不満が爆発しそうなんだ」
？不満と引き換えに胃が爆発しそう。
「悪いけど遠慮し――」
「よーしじゃあ順番決めジャンケンやるぞー」
？聞いてくださいレオーネ姉さん。ジャンケンしないで。

「・・・・・・私が勝ちましたぁ！」
？シェーレさんが満面の笑みで駆け寄ってきた。
？眩しい笑顔。顔面エクスタスだ（褒め言葉）。
「やだあ！」
？シェーレさんの幸せオーラを引き裂いて、腹の上に泣きっ面のサヨがダイブしてくる。
「私が最初におにーちゃんとラブラブえ○ちするの！」
「え？サヨ今なんて――」
？言い終わる前に、サヨの顔面目掛けて巨大バサミが切り裂いた。
？しかしサヨは身体を引いて危なげなく回避する。
？言い終わる前に始めないで。サヨ凄いこと言わなかった？・・・・・・いやまさかな。聞き間違いだろう。てかサヨ避けんのうま。
「それ以上、ご主人様に汚い手で触るな」
「・・・・・・私いまおにーちゃんとお話してたんだけど」
？サヨとシェーレさんの間に弾ける火花を幻視する。
「おにーちゃん、ちょっとまっててね。シェーレさんとお話してくるから」
「ご主人様、少々お待ち下さい。ゴミ掃除をしてまいります」
？視線を交錯させて何を感じたのか、二人は同じタイミングで俺に笑

いかけてきた。
？両者殺伐とした冷気を纏わせながら部屋を出ていく。
？サヨってあんなに怖かったっけ。
「アカメ、レオーネ姐さん、止めてきて」
？とはいえあのシェーレさん相手じゃサヨはひとたまりもないことなど明白だ。（全然そんなことは無い）
「な、何故だタツミ。私はもっとそばに居たいぞ」
「お姐さんも！」
？アカメ達がごねてくる、早くしなければサヨの命すら危ういので行ってもらいたいのだが。
？この状態に入ったアカメ達はそう簡単には動かない。
「止めてきてくれたら頭撫でてあげる」
「「行ってきます」」
？めっちゃ簡単に動いてくれた。
？その後しばらく、外から轟音が響き続けることとなる。

「ちょっと縄解きなさいよー!!」
？室内でも甲高い叫びが飛んだ。

？夜、誰もが寝静まった深夜に、アジト内をウロつく人影が一つ。
「うふ♡うふふふふ♡♡今回は失敗したけど、次はもっと上手くやるわ。タツミが渡された対毒薬も一個盗ったし、先ずはこの薬が効かない睡眠薬を作らないと。
　待っていてねタツミ♡タツミ♡タツミ♡タツミ♡♡」
？窓から差し込む月光がピンクのツインテールを濡らす。
？マインはこれっぽっちも反省していなかった・・・・・。

シェーレさんと訓練（訓練です。えっちなプレイじゃないです）

？柔らかな朝日で微睡みから覚める。
？霞む瞼を伸びをして振り払った。
「おはようございます、ご主人様」
？ベッドの横にはシェーレさんが立っている。
？何故か？彼女が激しいジャンケン勝負の末勝ち取ったからだ。
？一日限定のタツミ教育係、
？またの名を、

？タツミ独り占め係を。

？■■■

「ご主人様には、尋問のやり方について学んでいただきます」
？ナイトレイドの地下には牢屋がある。侵入者用だ。
？そして当然、侵入者から情報を引き出す為の尋問器材も常備している。
？薄暗い地下牢で毅然と発せられたシェーレさんの一言に、早くもやる気の殆どが削られた。
「俺、尋問とかやったことないんだけど」
「本当ですか!?で、では、は、初めてを頂けるのですね・・・・・・」
？顔を赤く染めるシェーレさん。尋問の初めてとは。
「ではまず、私を縄で縛ってください♡」
？縄を片手に息を荒らげる姿はかなり恐怖を誘う。
？目に光がないから尚更だ。
？訓練という名目上真面目にはやる。この組織に身を置く以上は、い

つか使う機会が訪れないとも限らん。
「・・・・・・んっ♡、あ♡♡」
?ただ縄で締め付ける度に声を漏らすのやめて欲しい。
「はぁ♡はぁ♡・・・・・・素晴らしいですご主人様♡」
?両腕を首の後ろで纏めて縛る。そのまま縄を壁のでっぱりに結び付けた。
?この体制では腕に力を込められない。抵抗は不可能だろう。
「あっ♡♡捕まっちゃいました♡♡」
?シェーレさんの虚ろな瞳にハートマークが浮かんでいる。
「で、では、シュチュエーションを決めましょう♡♡そうですね・・・・・さ、山賊っ♡♡山賊がいいです♡♡山道で豪華な馬車を襲い、金品一式と貴族の小娘を連れ去った強い山賊♡♡♡という設定で行きましょう♡♡♡♡」
?欲望ダダ漏れじゃねえか。
?もう着いていけないんだけど。俺知らん間に山賊にされてた。
?思い描いていた物からだいぶ外れている、シェーレさんの願望マシマシ妄想。
?というか山賊って捕虜に尋問するの?えっちなことしかしない気がするんだけど。
「くっ、離しなさい!私を誰だと心得るのですか!!」
?唐突にシェーレさんが叫びを飛ばした。
?急に始まるじゃん。
「下劣な山賊共め、こんなことしてタダで済まさないわよ!!」
?眉間に鋭くシワを刻むその顔に、普段のおっとり姿は微塵も無い。完全に役に入り込んでいる。
?意外な特技に正直驚いた。
「な、何とか言ったらどうなの!?」
?シェーレさんから言葉を求められる。
?しかし未だ状況に気持ちが追いつけていないのだ。どうしようか。
「ん?何だこれ。『シェーレが教える尋問マニュアル』?」
?尋問部屋の隅に置かれた机の上に、一枚の紙を見つけた。

？一番上に、お困りならこれをお読み下さいご主人様。と記載されている。
？どうやらシェーレさんが尋問に慣れていない俺の為に夜な夜な作ってくれたようだ。
？横で騒いでいる貴族の娘版シェーレさんの言葉を聞き流しつつ、マニュアルを開く。
　？まず、捕虜と接する時は常に冷たく、相手に付け入る隙を与えないようにしましょう。決して気を許してはいけません。？
？内容のマトモさに、コレが訓練なのだと思い出す。
？そうだ、意味不明なシュチュエーションは兎も角、真剣に取り組まなくては。
「・・・・・・うるせえ小娘だな。身体に教えてやんねえと分からねえか？」
？冷たい視線を意識しつつ、自分の思う山賊を演じてみた。これ合ってる？
「っ♡♡・・・・・・あ、貴方のような卑怯者には屈しませんわ！」
？マニュアルを横目で確認。この後の対応を決めなければ。
　？相手が強気な態度をとってきた場合、暴力で黙らせるのが効果的です。痛みとは一番手軽に恐怖を植え付けられる行為です。
？・・・・・・訓練といえども本番を意識して本気でやって下さいね??
？いきなり暴力かよ。しかも釘刺されてるし。
？い、いくぞ。いいんだよな？本当にいくぞ？
「い、いい加減うるせえんだよっ!!」
？シェーレさんの腹に拳を叩き込む。
？一切の容赦をしなかったのは、マニュアルで言われたからでもあるが、シェーレさんだったらこの位何ともないだろうという信頼があるからでもある。
「おっぐぅぅ♡♡♡♡・・・・・ゴホッ、ゴホッ、あ、貴方、よくも・・・・・」
？一瞬シェーレさんの目にハートが宿ったが、直ぐに振り払いキッと俺を睨みつけてきた。

「まだ分からないのか？ん？」
？先の痛みを思い出させるようにねちっこくシェーレさんの腹をさする。
「ふぅっ♡♡ぁっ♡♡♡んん♡くふぁ♡♡や、やめなしゃいぃ♡♡♡」
？焦らすような手つきに、早くも演技が途切れ始めた。
？演技力は凄いのに続ける忍耐力がこれっぽっちもないシェーレさんに、若干の呆れを抱いて腹を撫で続ける。
？ふと、人差し指が彼女のおへそに滑り込んだ。その時、
「んっひゅああ♡♡♡♡♡」
？シェーレさんが聞いたことない叫びを出した。
「・・・・・・」
「んひゅ♡♡♡♡♡ちょ♡♡♡そこっ♡♡♡♡ほんとにだめっ♡♡♡♡♡やぁぁぁ♡♡♡♡♡♡♡♡」
？確認の為再びくりくりほじくると、面白いくらいに叫び散らす。
？シェーレさんは身を蹂躙する快楽の荒波から逃れようと身を捻るが、縛られた縄を揺らすだけで徒労に終わった。
「そ、その♡汚い手を♡♡離しなしゃい♡♡♡」
？訓練は中断かと思いきや、シェーレさんが最後の意地でお嬢様ロールプレイを何とか繋いでいる。
？しかしその顔は喜びを隠しきれないようで、だらしない蕩け顔だ。
？シェーレさん限界っぽそうだし、さっさと終わらせてしまおう。
？マニュアルの最後の方に目を移す。
？相手が屈しそうになったらラストスパートです。苦痛をチラつかせつつ、言葉で屈服を誘いましょう。
従えばもう痛くしないというセリフが通常ですが、今回は少し捕虜が特殊なので変えてみましょう。
？次の言葉を、捕虜の耳元で蔑みを込めて囁いてください。
？捕虜の耳元でっ、蔑みを込めてっ、囁いてくださいっっ!!!・・・・・・
？
？過去一語気が強い。
？逆らう理由もないので、シェーレさんの耳に顔を寄せ、そこに記さ

れた文を口にする。
？このときおへそを強く押して僅かな痛みを与えることも忘れない。
「あのさぁ、口では何とか言ってるけど・・・・・・お前、喜んでるだろ」
「ッッッ♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡」
？シェーレさんの身体が一際強く跳ねた。
「何？変態だって見抜かれて興奮したのか？」
「しょ、しょんなことぉ♡♡♡♡♡」
？おへそを更に押し潰す。
「んあぁぁぁッ♡♡♡♡♡♡」
「一丁前に反抗してんじゃねえよ。・・・・・・おら、負けろ、雌犬」
？限界までへその窪みに親指をねじ込むと、シェーレさんもとい貴族の娘の我慢は遂に決壊した。
「ま、まってまってまって♡♡まけりゅっ♡♡♡ちゅよい山賊さまにまけちゃうぅぅ♡♡♡♡♡♡♡ダメダメダメ♡♡♡♡私貴族なのに♡♡♡山賊さまつよすぎてくっぷくしゅる♡♡♡わからされる♡♡♡だ、だめ♡それだけはほんとにだめ♡貴族のほこり失うのやだっ♡♡♡」
「そういうのいいから、さっさと堕ちろ」
「はひぃぃぃ♡♡いきがってました♡わらひいきがってましたぁ♡♡♡♡♡貴族のほこり捨てましゅ♡♡♡わらひは山賊さまのあしもとがお似合いだってわかりましたあ♡♡♡♡今まで間違ってました♡♡ちゅよい山賊さまに勝てるわけにゃいのに♡♡♡かんちがいしてましたあ♡♡♡♡小娘調子にのっててもうしわけございましぇんでしたあああああ♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡」
？これって尋問の訓練だっけ。完全にアウトな顔しちゃってるよ。
？シェーレさんは身体をギシギシと揺らし、潤んだ瞳から涙さえ流れ出ていた。
「山賊しゃま♡わらひ、身の程わきまえて犬になります♡♡♡♡いっしょう山賊しゃまの犬として生きていきますっ♡♡♡♡♡」

?まさしく犬のように舌を垂らして荒ぶる。
?ふと縛った腕に目を向けると、縄がくい込んで赤い跡が刻まれてしまっていた。
?痛々しい見た目だ。急いで解く。
?身体の支えが消え、シェーレさんが落ちるように尻もちを着いた。
?尻に響く痛みと、より増した見下されてる感に更に呼吸を荒くさせると、とあるポーズをとった。
?とても犬らしいポーズ。
?所謂、ち○ち○というやつ。・・・・・・もうどうしちゃったんだよあんた。
「はっ♡♡はっ♡♡はっ♡♡山賊しゃま♡♡♡♡ご主人しゃま♡♡♡♡くびわつけてください♡♡わらひを戻れにゃくしてくだしゃいぃ♡♡♡♡♡」
?発情度ＭＡＸで懇願してくる。虚ろな瞳にハートが爛々と光を放つのが見えた。
「いや、首輪って言ったって・・・・・・ある」
?マニュアルが置かれた机。その奥端で、ひっそりと粗雑な革首輪がこちらを見つめている。
?なんと用意周到なことだろう。訓練が進むと首輪が必要になると分かっていたのか。
?最初から犬になる気満々じゃん。
?ボロボロの革の首輪を唖然と眺めていると、シェーレさんが「はやくっ♡はやくっ♡」と急かしてきた。
?犬なのに待てできてないが。
?渋々と首輪に手をかけ、シェーレさんの首に巻く。
「ごしゅじんさまっ♡♡♡ごしゅじんさまっ♡♡♡くぅーん♡♡♡♡くぅーん♡♡♡♡」
?ハートの輝きをより一層弾けさせたシェーレさんが、媚び媚びの鳴き声をあげる。
?潤んだ瞳が一心に見つめてくるさまは、いやに扇情的だった。
「あっ♡はふっ♡所有物にされちゃってる♡♡くぅーん♡♡くぅーん

♡♡ごしゅじんさま♡♡」
？首輪なんてつけたことがないから手こずる。ちょっと力加減を間違える度に、シェーレさんは微かな嬌声を奏でた。

？カチャリ、と何とか首輪を装着する。
「はっ♡はっ♡♡ごしゅじんさま♡♡これからがんばります♡♡♡♡たくさん、こきつかってくだしゃいっ♡♡♡♡♡♡♡♡」
？相変わらずのち○ち○ポーズでシェーレさんがなんか言ってきた。
？荒い呼吸を繰り返しながらも、必死に言葉を紡ぐ姿が本当に犬を想起させる。
？無意識に、
？本当に無意識に、
？俺はシェーレさんの頭を撫でていた。

「くぅッッ♡♡♡♡♡♡ふわぁぁぁ♡♡♡♡♡♡♡♡ご、ごしゅじんしゃまぁ♡♡♡♡♡♡ごしゅじんしゃまあああああ♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡」

？暫く嬌声が止むことはない・・・・・・。
？・・・・・・尋問の訓練ってなんだっけ。

帝都までお散歩（直喩）＆ａｍｐ；全ての流れを変えるセリューちゃん

？ここは、ナイトレイドアジトから帝都に行く途中に存在する森の中。
？木々の隙間から零れた微かな陽光が二つのシルエットを写す。
？片方は人間。それは分かる。体格からして男だろう。
？しかし、もう片方、人間に追従しているのは・・・・・・・獣？
？四足歩行の動物が、男に首輪を引かれて進んでいる。
？そういった感想が出てくるであろう光景だ。そして、草の屋根が晴れその姿があらわになったとき、またこういう感想が出てくるのだろう。
？すなわち、
？えぇ？（困惑）
？と。

？俺だって客観的に今の自分を見れば困惑する。
？だって、レオーネ姐さんが四つん這いで着いてきてるんだもん。
？四つん這いで、着いてきてるんだもん。四つん這いで・・・・・・。
？しかも、その首には猛獣でも捕まえるのかという鉄製の首輪がはめられ、そこから鎖が俺の手まで伸びている。
？半獣化はしていないものの、四足歩行の獣だった。
？目が完全に飢えた獅子のそれだった。
「どうだタツミ！アタシの方がシェーレよりもペットっぽいだろう？」
？獣が見せる独占欲と対抗心。手と膝を土で汚しながらも、レオーネ姐さんは嬉嬉として笑顔を浮かべる。
？そう、何故レオーネ姐さんがこんなトチ狂った行動に出たかというと、今朝ホクホク顔で起床してきた首輪付きシェーレさんを見て、全てを悟った上謎の嫉妬を発動したからだ。

？自分をペットにしてくれと厳(いかめ)しい鉄首輪を差し出して来た。
？理由までトチ狂ってる。トチ狂いガールだ。
「もうあんな奴らと話しちゃダメだぞタツミ。タツミの要望は全部おねーさんが叶えてやるから」
？花咲くような笑顔だが、如何せん瞳に輝きがないため恐怖以外の感情が湧かない。
？くたびれながら足を前に出すと、爪先が盛り出た木の根っこに引っかかった。疲労が視野を狭くするとは事実のようだ。
「はぐぅ♡♡」
？俺の身体が前によろければ、当然手に握った首輪も引っ張ってしまうわけで、レオーネ姐さんは唐突かつ乱暴に首を引かれることとなった。
「ご、ごめんレオーネ姐さん」
「た、タツミ♡♡すごい♡今のっ♡♡もっかい♡♡♡もっかい雑に引っ張って♡♡♡♡」
？ダメだこりゃ。
？足元に意識を集中させつつも、足を速める。
？向かう先は帝都。買い出しである。
？街にさえ着けば、流石にこの四つん這いプレイも終わりを迎えるだろう。
？希望を胸に、森を急いだ。
？あ、やべ、また根っこだ。
「ひゃぁぁ♡♡♡♡」

？■■■

？そんなこんなで帝都のスラム街。
？イメージと反してここは活気づいていた。

「ふふん。タツミ、おねーさんがここを案内してやるぞ！」
？四つん這いから直立二足歩行に進化したレオーネ姐さんが胸を張る。依然として彼女の首では鈍色がギラついているが。
？なんでもスラム街は自分の街も同然なんだと。
？というかレオーネ姐さんが胸を張ったことで、反動で二つのお饅頭が凄いことになっている。
？すげえや。
「先ずはこっちだ！」
？レオーネ姐さんに手を引かれる。
？全力で幸せオーラを撒く姿を微笑ましく眺めている最中、肩に衝撃が走る。
「あ、すいません」
「・・・・・・いえ」
？ぶつかってしまったのは、普通のおじさんだった。
？咄嗟に謝りを入れるが、返ってきたのは品定めする様な視線と無愛想な返事だけ。
？そのまま直ぐにおじさんは人混みに消えていく。
「？なんかしちゃったかな？まあいいか」
？やけに足早に去って行ったことに疑問が湧くが、そういうことも有るだろうと割り捨てた。
「ほらタツミ、こっちだこっち！」
？元気いっぱいなレオーネ姐さんがグイグイと引いてくるため慌てて着いていく。
？そこでようやく異変に気づいた。
？ポケットに感じるはずの重さが消えている。
？まさかと思い手を突っ込むと、案の定財布が消えていた。
「・・・・・・今の奴か!?」
「ど、どうした？急に大声上げて」
「金、金取られた！」
「なに!?タツミのお金を盗むとは許せん!!」
？え？それお前が言うの？

「さっきの男だな？待っててくれ。直ぐに取り返してやる」
？制止の暇もなく、レオーネ姐さんがスラムの街に飛び込んだ。
？完全にアサシンの目で駆けていくが大丈夫だろうか。
？見えなくなっていくレオーネ姐さんの背中に、先の男の無事を祈るばかりだった。
？ん？あの店で売ってる串焼き美味そうだな。お、こっちもなかなか良さそうだ。
？鼻腔を突き抜けるスパイシーな香りに、無意識のうちに足が動く。

？・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・。

？・・・・・・・迷った。
？あっちの屋台こっちの屋台と彷徨ううちに、帰り道が分からなくなってしまった。
？スラム街で一人はそこそこに危機的状況なのではないだろうか。
？しきりに辺りを警戒する。怖いアンちゃんには近づかないようにしなくては。

「――どうかしましたか？」
「ひいっ!?」
？背後から声が掛かる。
？反射的に驚いたが、振り返った先にいるのは女性だった。怖いアンちゃんじゃなかった。
？脳が冷静を取り戻していく。
「す、すみません、そんなに驚くとは」
？目を丸くする女性。
？茶髪ツインテールの美人さんだ。
？しかし注目すべきはその服装。軽装の鎧。
「その服は」
「帝都警備隊セリュー！正義の味方です！」

？やはり、警備隊か。アカメ達から危険だから近づくなと口酸っぱく言われた相手だ。
？つまりこの娘は、ナイトレイドの敵。
「きゅうぅぅ～」
？平静を装いながら最大限の警戒を敷いていると、足元から形容しがたい鳴き声が聞こえた。
？なんだこのちっこい生物。
？ヘンテコな二足歩行の犬？的な謎生物が不機嫌そうにこちらを見てくる。
？威嚇に小さく唸ってさえいた。
？よく分かんないけどキレられてる・・・・・・。
「あのー、ソレは？」
？ヘンテコ生物を指して尋ねる。指を向けられたことで更にジタバタ暴れてらっしゃる。
「帝具ヘカトンケイル！ご心配なく、悪以外には無害ですから！」
？所謂、生物型帝具という物か。じゃあ俺とこの帝具の相性が悪いから嫌われてるのだろう。俺も初見ヘンテコって感想が出てきたし。
「ところで、お困りなのでは？」
？下から刺さる敵意の視線とは真逆の親切百パー笑顔、敵ということも忘れて癒されそうだ。
「ああいや、道に迷ってしまって。もといた場所の名前は分かるんですが・・・・・・」
「それは大変！パトロールがてら、お送りしますよ！・・・・・・こっちです！はぐれないでくださいね！」
？強引に手を取られる。
？女の子らしい柔らかい手。
？でも俺はドギマギしない。この程度のスキンシップ慣れっこなのだ。
？・・・・・・ドギマギしない。
「きゅうううう～～!!」
？は？別に意識してねえし。変な事言うなしヘカトンケイル。

？下で騒ぐヘカトンケイルことコロを睨みつけたら、更に暴れ具合が上がる。
？怒りボルテージの溜まったコロが、俺の足に体当たりを繰り返す。
？しかしブヨブヨという感触だけで欠片も痛くない。
？無視して歩くその最中（さなか）、
？唐突に、
？本当に唐突に、

？心臓が大きく鼓動した。
「ぐっ――!?」
？身体の中が煮え立つ。
？湧き上がる力の本流は、瞬く間に肥大化し、最早抑えきれない程まで到達してしまった。
？他の帝具に刺激されたのか、それとも唯の偶然か。
？遂に限界を超えたその力は、体外へと解き放たれる。

？カーマデーヴァが、暴発した。

「はぁ、はぁ、・・・・・・やばい」
？全力で抵抗した影響により、酷く疲労感がのしかかるが、そんな事気にかけられる余裕も無い。
？目の前で俺の手を引く体制のまま微動だにしないセリューを、固唾を飲んで見つめる。
？本当にやばい。カーマデーヴァが暴走した。つまりそういうことだ。
？ガクブルに震ていると、無言でセリューが歩き出した。
？手を繋がれた状態なので着いていく他ない。
？ただ無言で足音だけがいやに大きく響く。
？先行するセリューの背中と、揺れるポニーテールが何故か不気味に感じられる。
？暫く沈黙の間が続き、セリューはやがて路地を曲がった。

？驚く程狭く暗い道に入る。左右を壁に阻まれた窮屈なそこは、分かりやすい程に路地裏だった。
「あ、あのー、セリューさん？」
「・・・・・・・・・・・・・こっちの方が近道なんです」
？だいぶ溜めた後に、セリューは短く呟いた。
？絶対嘘だろ。
「俺、やっぱりこの辺で――」
？引き攣った笑顔で緊急離脱を試みた瞬間、握られた手がえげつない力で締め付けられた。
？いだだだだだ!!折れる折れる！
？骨の軋む音が聞こえる程に強い力だ。
「大丈夫です！私に着いてくれれば安全ですから！・・・・・・あ、ところでお名前はなんて言うんですか？」
？決してこちらを振り返らずに声だけ飛ばしてくる。
「た、タツミだけど。辺境出身だから苗字はないよ」
「そうですか、・・・・・・タツミさん。タツミさん。タツミ・ユビキタス・・・・・・フフフ」
？タツミには知りえないことだが、この時のセリュー――フルネームでセリュー・ユビキタス――は、瞳孔はカッ開いてるし、口端は異常なほど吊り上がってるしで、ドン引き必至の捕食者の顔、又はサイコパス顔だったため振り返れないのだ。
「きゅ～～」
？先の険悪な振る舞いとは打って変わって、上機嫌に俺の足にコロがしがみつく。
？コロまで懐いたんだけど、カーマデーヴァって異性の好感度上げるんだよな。人型の帝具以外に性別とか無いはずだけど。
「きゅっきゅっきゅ～」
？俺の足元で楽しそうにはしゃぐコロを見ていると、そこに含まれているのが、恋愛的感情ではなく信頼のようなものだと何となく分かった。
？あんな生活を続けると否が応でも愛情には敏感になる。

?無性相手には信頼度が上がるようにできてるのか?
?・・・・・・・ふむ、分からん。もう少し情報がないと断定しかねるな。
?カーマデーヴァの能力考察は一旦諦め、この誘拐寸前の状況を打開する方に頭を回すほうが賢明だ。
?まずはこの握り潰さんばかりの手から逃れる。全てはそこからだ。
?手を軽く引いてみる。
?凄まじい握力に磨きがかかってしまった。いたい。
?・・・・・・・・・・・これ無理じゃね?
?最初の壁が果てしなくデカい。無理だ。諦めよう。
?抵抗が無意味であると静かに悟り、俺はただセリューの後を追うだけとなる。
?大人しく誘拐されようと腹を括ったその時、俺の目の前で轟音が炸裂した。同時に粉塵が舞う。
?一瞬にして視界を遮られたかと思うと、俺の身体が強く後ろに引っ張られた。
?唐突な出来事にセリューとの手が離れる。
?俺は流れるようにその人に担がれ、入り組んだ路地裏を人外じみた速度で駆け抜けていった。
「れ、レオーネ姐さん?」
?俺を担いで疾走しているのは、半獣化までしたレオーネ姐さんだった。
?どうやらあの状況から俺を救出してくれたらしい。
「タツミ!大丈夫だったか!?警備隊の女に変なことされなかったか!?ごめんタツミ、アタシが離れたばっかりに」
?酷く不安に染まった表情で、自分の不甲斐なさを嘆くレオーネ姐さん。
「別に何ともなかったから大丈夫だよ」
?なるべく穏やかな笑顔を意識して言うが、レオーネ姐さんの不安は拭いきれていなかった。
「あの警備隊の女、確実にタツミに気があった。――チッ、色目使いや

がって、アタシの許可無くタツミに触れるなんて許さない。次会ったら確実に殺す・・・・・だいたいアカメ達もそうだ。タツミに必死で尻尾振って、本当に醜い。アタシなんだ。タツミのペットはアタシなんだ。なのにあの雌共、ことある毎に擦り寄って。ペットはアタシ一人だけなのに。ああ、腹立たしい・・・・・」

?不穏な言葉を並べ立てた小声の呟きを、俺は微かに聞いとる。

?身震いしながら、俺はレオーネ姐さんに担がれて郊外まで駆けるのだった。

?■■■

?タツミが連れ戻された後、セリューは活気づくスラム街を鬼の形相で駆け回る。ちなみにコロは引きずられてる。

「クソクソクソクソッッ!!どこに行ったあの女!!私とタツミさんの逢瀬を邪魔しやがって!!本当なら今頃は私の家で愛を囁きあっているはずだったのに・・・・・助けなきゃ。あの女の魔の手からタツミさんを助けなきゃ。そうだ、タツミさんだって私の助けを待っているはず。待っていてくださいタツミさん!直ぐにセリューが助けに向かいます。もしそれを邪魔するやつらがいたら

・・・・・そいつらは悪だ。一人残らず殺してやる。

さあ、タツミさんに近寄る羽虫共を全て駆除するために、正義出動だ・・・・・・アハハ♡」